

2026-2027 年度 つながる創造:ACY アーティスト・フェローシップ助成
審査概況

アーツコミッション・ヨコハマ(ACY)による、アーティストのキャリア形成を支援する助成制度は、2016年度以降、名称や内容を更新しながら継続して実施している。

2023 年度に年齢制限および横浜市内に活動拠点を有することといった従来の条件を見直し、「横浜市内での滞在」および「地域住民との交流を含む活動」を要件として再構成した。さらに 2026 年度からは活動期間を 2 年間とし、1 年目の滞在・リサーチを踏まえ、2 年目に作品発表を行う構成としたほか、提出書類に推薦状を加えた。採択人数は2名とした。

そうした変化のあった今年度は 65 名の申請が寄せられた。分野別では、美術分野が 45 名(69.2%)と全体の約 7 割を占めており、近年同様の傾向が継続している。

申請者の所在地については、東京都が 21 名(32.3%)と最も多く、横浜市 17 名(26.2%)、神奈川県(横浜市を除く)7 名(10.8%)を合わせると、これらで全体の約 7 割を占めた。首都圏を中心とした応募傾向が続くが、北海道や近畿(各 4 名)、海外(2 名)など、広域からの申請も見られた。

年齢層については、30 代が 25 名(38.5%)と最も多く、次いで 40 代が 24 名(36.9%)となり、応募者の約 4 分の 3 が 30~40 代の中堅層を占めた。30 代が中心である傾向は昨年度と同様であるが、今年度は 40 代の割合が増加し、20 代は 11 名(16.9%)と減少した。

【分野内訳】 美術 45 名・舞台芸術 20 名 ※分野は申請者の申告による

【所在地別分布】 横浜市 17 名、神奈川県 7 名、東京都 21 名、その他関東地方 5 名、北海道 4 名、東北 1 名、中部 1 名、近畿 4 名、中国 1 名、四国 1 名、九州 1 名、海外 2 名

【年齢別分布】 20 代 11 名、30 代 25 名、40 代 24 名、50 代 4 名、60 歳以上 1 名】

審査は、3 名の審査員による一次選考(書類選考)および二次選考(面談選考)を経て実施し、最終的に 2 名を採択した。選考にあたっては、以下の観点に基づき、書類および面談の内容を踏まえて総合的に評価し、合議により決定した。

選考のポイント

- ①独自性:芸術的手法・発想の優位性
- ②地域性:横浜での活動の意義
- ③実現性:計画・資金計画の妥当性

審査員(敬称略/五十音順)

乾久美子(横浜国立大学教授、Inui Architects 主宰)

帆足亜紀(横浜美術館 国際グループ 兼 学芸グループ グループ長、横浜トリエンナーレ組織委員会事務局 総合ディレクター補佐)

丸岡ひろみ(YPAM2025 ディレクター、東京芸術劇場 事業企画課 芸術祭担当課長)

審査員総評

乾久美子(横浜国立大学教授、Inui Architects 主宰)

私は建築の分野におり美術や舞台芸術を専門としていない。そうした立場のため、美術や音楽、舞台に関わる活動の予定が書かれた申請書やポートフォリオを完全に理解できていたかわからない。表現活動の前提や動向を知らない門外漢にとって、理解することが難しい申請書も多くあった。そうした私であっても面白そうと思う応募は、分野を超えたところにある普遍的な問題に触れているものであった。

本助成がユニークなのは、横浜との関わりを求めることである。これは、助成をする横浜市にとって重視すべき要素だが、応募する表現者にとって、必ずしもそうとは言えないものであり、それまでの活動の延長線上に「横浜」という異分子を組み込むことは容易ではないはずだ。だからだろうが、何割かの応募は、この難しいテーマに対して表面的なアプローチにとどまっていたように感じた。そうした中で突出していると感じられたのは、横浜にしかみられない文化や横浜の意外な側面を探り出していた提案であった。

では、横浜のユニークな側面を浮き彫りにすればいいということかという、そうでもない。近年はリサーチベースの表現活動が当たり前だろうから、訓練を積んでいけば、どのようなテーマにも対応できるようになるのかもしれない。しかし、表現者にそうしたスマートさをこの助成、ひいては社会が求めているわけではないと思う。ということで、横浜との関わりが、その作家にとってどのぐらい自然なものとしてあるのかを重視した。しかし、それまでの表現活動と横浜の何かがたまたまマッチングしないかぎり本質的な自然さは生まれないはずだ。そうした意味で、本助成は、活動のユニークさや実力を純粋に問うというものでもなく、応募者のキャリアの段階もふまえながら、今、この段階で適切であると思われる方を選ぶというものであった。

帆足亜紀(横浜美術館 国際グループ 兼 学芸グループ グループ長、横浜トリエンナーレ組織委員会事務局 総合ディレクター補佐)

ACY アーティスト・フェローシップ助成は今回、支援期間が1年から2年へと延長され、1年目にリサーチや制作、2年目に発表を行うというプログラムへと生まれ変わった。その過程で横浜市内の拠点に滞在することが条件づけられている点は変わらない。

しかし、2か年という時間はそれなりに長い。そこで、若手の将来の可能性に賭けるのか、着実なアウトプットを重視するのか、あるいはそれらを超えて「横浜」という地の利を最大限活かせる人物を選ぶべきか、悩みながら審査を進めた。

本助成では、地域との交流が期待されている。そのため、横浜のあまり知られていないディープな歴史や場所に深く切り込むプロジェクト提案も少なくなかった。しかし、審査に当たっては「横浜」や「地域交流」という枠組みに別の視点を重ねたいと考えた。つまり、単に横浜という場所で人と出会うことにとどまらず、表現活動を通して他者にどのような変化をもたらすことができるか。そのような視点から、申請者がどの程度の解像度や濃度で他者に干渉しうるかどうかを基準に審査をした。

今回選ばれた2名とも極めて個人的な経験から他者へ働きかける方法を構想している。その具体性が他者に対する確実な想像力へとつながっている点を評価した。

審査は作家や作品の優劣を批評的に裁定することではなく、申請者が「今、このタイミングで」ACYのリソースを最大限に活用できるかを見極める作業である。したがって、今回選に漏れた方々も、ぜひ来年以降に再挑戦してほしい。アートとは常に、極めて個人的な視点から社会を照射するものであり、だからこそ人の心を動かし、価値観を更新する力を持つ。本助成がそのような出会いを仲介する一つの回路となれば幸いである。

丸岡ひろみ(YPAM2025 ディレクター、東京芸術劇場 事業企画課 芸術祭担当課長)

アーツコミッション・ヨコハマが実施する ACY アーティスト・フェローシップ助成の審査に初めて参加した。私は YPAM のディレクター経験を踏まえて選任されたと認識しており、主に舞台芸術分野の視点から評価にあたった。本助成は今回より 2 年間の継続支援となり、活動の射程が大きく広がった点に特徴があると感じた。

書類審査においては、独自性や新鮮さ、同時代性、精度を重視した。多くの提案が横浜での活動やフェローとしての可能性を示唆しており、自身の知らない地域資源に触れる機会ともなった。一方で、舞台芸術分野からの応募が比較的少なかったこともあったのか、評価が他の審査員と分かれる場面も見受けられた。

面接審査では、「2 年間で何を行い、どのように展開していくのか」が具体的にイメージできる提案を重視した。滞在におけるインプットとアウトプットの関係性から、どのような可能性や具体性が立ち上がるかが重要な評価軸となった。

また、本助成が重視する地域性についても、評価にあたり慎重な検討を要する論点であると感じた。地域との関わりは重要な要素である一方、芸術活動は特定の条件に規定されるべきものではない。横浜の歴史やリソースとの関係性を強調する提案も多く見られたが、それ自体が目的化するのではなく、実践の中から必然的に立ち上がっているかが重要であると考えた。地域との接続が、各々の実践や思考を拡張する契機となっているかを重視した。

今回採択された2名のプロジェクトは、いずれも本助成の枠組みと高い親和性を持ち、2 年間を通じて展開される意志と具体性を備えている点が評価された。本助成を通じて横浜との関係性の中で展開される活動が、個々人の芸術的な成長へとつながっていくことを期待している。